

この戦争は大丈夫なのか」誰にも口に出さない不安が徐々に首を持ち上げてきていた。

八月十五日朝、「正午から重大放送がある」との通達、営外の所定場所ですべて全員整列、直立不動の姿勢で天皇陛下の玉音放送に耳を傾けた。ラジオは雑音で殆んど聞き取れない。しかし雰囲気は察知できた。周囲の動揺が伝わってくる。帰途の行進は乱れた。帰営後直ちに「貴様らはたんでいる。それでも帝国軍人か。今から気合を入れる」練兵場の駆け足が続いた。夕刻馬の世話一切が終り、夕食後の学習時間もうつろな気分ですべて終始した。連日鳴り響いた空襲警報はやはり鳴らなかつた。「戦争は確かに終わったんだ」ホツとした気分ですべて翌日まで寝りこけた。

翌日から演習は中止。兵器類は全

て返還。書籍、書類等は次々と焼却、暗闇（やみ）の火の粉に「魂が飛んで行くようだ」の声なきこえてくる。

感傷的気合が入隊以来初めて体に流れる。大事に手入れしてきた馬が民間に払い下げられて行く。心なしか悲しげな嘶（いなな）きが見送る我々の心をえぐる。「あの馬たちはどうなるんだろうか」「俺たちはこれからどうなるのか」「何処かへ連行されるのだろうか」「いや帰郷できる筈だ」：依然上層部からの伝達は何も無い。不安の連日である。幹部将校が自決したとの報が飛ぶ。真相は不明のままだ。私はこのすこし前、右足首を痛め治療を受けていた。ある日治療室で軍医が、「貴様の病気は長びく。軍隊で治療する時間はない。地方（軍隊以外は全て地方と呼んでいた）へ帰つたら気長に治せ」。

この一声で帰郷出来る事が明らかになつた。

別れに際し、野砲校で夫々名簿を残す事になった。母親の名を連れ、我々の氏名は保護者欄に記載、小隊長の姓を頭に〇〇高等女学校名簿とした。後日再動員の際の連絡のよすがにするとする。この段階でまだ稚気にも劣る愚考に、怒りを通り越し苦笑を禁じ得なかつた。

九月上旬に除隊、復員列車で西下。貨物車であつたが誰からも文句が出なかつたのは幸であつた。後日海外からの引揚船の惨状をきくに付け、見るにつけ、文句を言へば罰があたると言うものだ。

復員後復学手続きに登校。無事帰還を歓迎合う一方戦没者の報、生死不明の友のニュースも伝わり、悲喜交々の中、復学手続きをとる。ここ